

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

中学三年生の亜樹は卓球部に所属し、美佳とダブルスのペアを組んでいたが、夏の引退試合を前に一方的にペアを解消されてしまう。美佳は亜樹より実力の高い選手とペアを組み県大会に進んだが、それ以来二人は話すこともなくなっていた。亜樹は今、高校受験に向けてお姉ちゃんに勉強を教えてもらっている。

その日も、学校から帰ると、お姉ちゃんが待ちかまえていた。

「早く、着がえて」

本番まであと二週間。お姉ちゃんは、もう、一分一秒も無駄にはできないという勢いだ。着がえ終わった亜樹が、リビングのこたつに足をつっこんだところで、インターフォンが鳴った。

「亜樹、美佳ちゃんよ。下の花だんのところで待ってるって」

インターフォンの受話器を置くと、お母さんがいった。

「美佳……?」

亜樹がおどろいていると、お姉ちゃんは「十分でもどつてきてよ」といった。

美佳とは夏の県大会以来、一度も話したことがなかった。亜樹は一方的にダブルスを解消された「うらみ」があつて、廊下ですれちがっても気づかないふりをしていた。亜樹はそんな自分をしょぼいなど思ったけれど、なんとも思っていないフリをする気にはどうしてもなれなかった。美佳のほうも、県大会のあとにカラオケに参加しなかった亜樹

のことを「おもしろくない」と思っているのだろう。むこうから声をかけてくることもなかったし、亜樹はそれよしとしていた。このまま卒業して、ダブルスをくんでいたことなんかわすれよう、ふたりの関係はなかったことにしようと思っていた。

そんな美佳が、約束もなくいきなりたずねてくるなんて、いったいなんだろう……。でたくないな、いないふりをしようかな……。

「ちよつと、さつさと用事すませてきてよ。時間の無駄でしょ！」

※ちよつちよ
躊躇している亜樹に、お姉ちゃんがいう。

「あと、九分三十秒だから」

お姉ちゃんが時計を投げてよこす。

亜樹は、所詮数分でおしまいでできるのだから、でちゃったほうが早いし、すつきりするだろうと覚悟を決めて立ちあがった。

玄関をでてマンションのエレベータを待っているだけで、一分がすぎた。時計をにぎりしめて、いさんで一階へとおりてゆく。① 心臓がドキドキしていた。

一階に到着してマンションのエントランスにむかうと、すぐに美佳が見えた。おもての花だんのところであつむいてたらずんでいる。自動ドアが開くのと同時に、美佳が顔をあげた。

「ごめんね。とつぜん」

亜樹が近づくと、美佳がいった。

「ううん、いいよ」

亜樹はつとめて、明るい声をだした。美佳はなんだかつかれた顔をしていた。そして、亜樹の顔を見て、なにかいおうとした瞬間、とつぜんポロポロと涙をこぼし始めた。

「ど、どうしたの？」

だけど美佳は、泣いてるばかりで言葉をつまらせている。

美佳は試合で負けるたび、いつも盛大に泣いていた。人前で感情をおしこらすことに慣れている亜樹は、負けてくやしくても泣くことはなかった。いつも家に帰ってから、こっそりふとんの中で泣いた。

そんな自分がイヤだったこと。人前でも盛大に泣ける美佳を、うらやましいと思っていたこと。そんな美佳を、よくだきしめてなくさめていたこと。

亜樹は泣いている美佳を見て、そんなことを思いだした。

今は、そばで立ちつくすばかりで、だきしめてあげる気にはなれない。

「ごめんね、いきなり……」

ようやく泣きやんだ美佳が、顔をあげた。泣きすぎで少しむくんだその顔は、亜樹を少しなつかしい気持ちにさせた。

「わたしね、推薦、落ちちゃって……」

美佳は、そういうとペロツと舌をだして、亜樹を見た。亜樹はかけるべき言葉を見つけれなくてだまっていた。やさしい言葉をかける気にはなれなかった。あの頃みたいに、だきしめてなくさめる気にはなれなかった。

② ふたりの間に、気まずい空気が流れる。

「ああ、わたし、なににきたんだらうね」

先に、その空気に耐えられなくなったのは、美佳のほうだった。

「亜樹とのダブルス、一方的に解消して、クリちゃんとかくんだくせに……うらざり者のくせに、こんなぐちをいいにくるなんて、ひどいよね」

そういつて弱々しく笑う美佳を見て、亜樹は「なんだ、わかってたのか」とおどろいた。

「わたし、亜樹が純粹に卓球がやりたくて入部してきたタイプだって、ちゃんと気づいてた。だって亜樹、男子に全然興味なさそうだったもんね」

そういうのわかってて、あんなに無邪気に、かんたんにダブルスを解消してきたのかと。

「でも、先輩に彼氏の友だちを紹介してもらいたかったし、県大会の大舞台で試合もしてみたくて……それでわたし、亜樹をうらぎったんだ」

だけど、それを知った亜樹に、ふしぎと怒りはわいてこなかった。

「それなのに推薦に落ちたってわかったとき、まっさきに思いうかんだの亜樹だったんだ。負けてくやしって素直にいえるのって、ずっと亜樹だけだったから。わたし、亜樹になぐさめてほしくてここにきたんだよ。亜樹がわたしのこと怒ってるのわかってるのに……ほんと、ひどいよね」

こんなふうにならざるに素直に白状できる美佳を、うらやましいとさえ思った。いつも自分の気持ちをストレートにおもてにだせる美佳のことが好きで、ダブルスをくめることがほこらしかった「あの頃」がよみがえる。

「ただ「あの頃」みたいにはげましてあげる気には、やっぱりならなかった。

「そうだね。ひどいね」

亜樹の言葉に、美佳がおどろいた顔をした。ダブルスを解消されたときさえ、文句ひとついわなかった亜樹が、

こんなにストレートなことをいうとは思っていなかったのだろう。

③「でも、しかたないと思ってる」

もちろん、美佳のことをひどいヤツだとのしることもできた。そうして、被害者になりきることもできた。

「わたしの実力が足りなかったんだもの。なんだかんだいっても、美佳はまじめに練習して、本気で試合に勝ったそうだったし、あのままわたしとくんだったら、美佳は絶対に県大会にはいけなかっただろうし」

「ただ口をつけてでてくるのは、うらみつらみじゃなくて、本音。」

「彼氏がほしいわけじゃなくて、本気で卓球してるわたしとしては、美佳の足をひっぱってることのほうが辛かった。だから、べつにいい」

それに、美佳が本気で卓球をしていた自分に気づいてくれていたこと。ちゃんと自分を見ていて、知っていたこと。そして、そのことを素直につたえてくれたこと。そのことのほうがうれしくて、うらんでいた気持ちがすっかりなえてしまった。

「亜樹、なんかかわったね」

目をうるませたままの美佳がいった。

「なんか、強くなったって感じがするよ」

亜樹はだまって首をひねった。

かわったわけじゃない。強くなったわけじゃない。こんなふうにはつきりと気持ちをつたえられたのは、先に白状してくれた美佳のおかげだ。そして今はもうべつにうまくやる必要がない美佳だからこそ、いえた本音だ。

亜樹はそんな自分を、あいかわらずしょぼいなと思った。

「ああ、なんか亜樹の前で泣いたら、ビッグマック食べたくなっちゃったよ」

美佳の言葉に、亜樹は思わずブブツとふきだした。試合に負けるたびに、マクドナルドでビッグマックを食べていた「あの頃」がよみがえる。

「ねえ、受験終わったら、ビッグマック食べにいこうよ」

すっかり立ち直った美佳が明るい声でいう。そのゲンキンさにあきれながらも、亜樹はやっぱりうれしくなってしまう。

「なんかそれって、縁起わるくない？」

亜樹が眉をひそめていうと、美佳は「あつ、そうか」って舌をペロツとだしている。まったく、美佳にはかなわない。そしてすっかり美佳をゆるしてしまっている自分をどうしようもないなと思った。

なのに、ふしぎとそんな自分がイヤではなかった。うらみつづけるより、ゆるしてしまえるほうが、未来は明るい。

そうしてふたりは「ビッグマックをいっしょに食べるにいく」約束をして別れた。

亜樹は、合格のあとの楽しみができて、うれしかった。こんなふうに美佳との関係が復活できるなんて、予想もなかったことが起こるもんだなと、その事実におどろくばかりだった。

⑤ 奇跡みたいだと思った。

奇跡って起こるもんなんだな、と。

だけど、いい気分で家にもどった亜樹をでむかえたのは、きびしい現実。

「十分でもどつてきてって、いったはずだけど」

お姉ちゃんが、不機嫌な顔で亜樹をにらむ。にぎりしめていた時計は、三十分も経過していた。亜樹はうきうきしていた気持ちをぐくりと飲みこんで、顔をひきしめた。だまってお姉ちゃんのむかひにすわると「三十分の無駄だったねえ」としつこくくいさがるから、亜樹はきっぱりといった。

「無駄じゃないよ。このたった三十分で、あきらめるのは早いってよくわかったから」

亜樹はお姉ちゃんをまっすぐに見てつづけた。

「だいじょうぶ。奇跡は起きるよ」

亜樹の言葉に、お姉ちゃんがにやりと笑う。

「じゃあ、その奇跡とやらを見せていただきましようかね」

そして、亜樹の前に問題集がさしだされた。

「はい、始め！」

⑥ 亜樹は大きくうなずくと、すぐにシャープペンをにぎりしめた。笑って、ビッグマックを食べるために。

(草野たき『リボン』ポプラ社)

※躊躇……ためらうこと。

※うらみつらみ……積み重なったうらみ。

※ゲンキンさ……損か得かで、ころりと態度を変える様子。

問一——線部①「心臓がドキドキしていた。」とありますが、このときの亜樹の心情や様子の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美佳と対面することを決めて勢いこんでいるが、久しぶりに話をすることに緊張している。
- イ もう二度と美佳と話すことはないと思っていたが、受験前に突然会いに来たことに驚いている。
- ウ 姉から十分以内に返るように言われ、美佳と時間内にきちんと話せるのか不安に思っている。
- エ 美佳が突然訪ねてきたため、何か怒らせることをしてしまったのではないかとおびえている。
- オ 長い間話していなかった美佳と話せることがうれしく、仲直りできることを期待している。

問二——線部②「ふたりの間に、気まずい空気が流れる。」とありますが、このときの二人の心情や様子の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美佳は推薦の話をすることで亜樹と元の関係に戻りたいと思っているが、亜樹はペアを解消されたくらいを忘れることができず、美佳と仲直りしたくないと思っている。
- イ 美佳は推薦の結果報告をきっかけに亜樹と仲直りをしたいと思っているが、亜樹はどのような反応をすればいいか分からず、言葉をかけられないでいる。
- ウ 美佳は今までのことを謝り亜樹にゆるしてもらおうと思っているが、亜樹はこちらの状況を考えず自分の都合を優先している美佳を突き放したいと思っている。
- エ 美佳は推薦に落ちてしまったことを亜樹になぐさめてほしいと思っているが、亜樹は自分を裏切った美佳をすぐに受け入れることができず、はげます気になれないでいる。
- オ 美佳は自分がこんなに泣いているのに気に留める様子のない亜樹を薄情だと思っているが、亜樹は泣

けばゆるされると思っている美佳を見ていらだちを感じている。

問三——線部③「『でも、しかたないと思ってる』」とありますが、このときの亜樹の心情を具体的に説明しなさい。

問四——線部④「どうしようもないなと思った。」とありますが、このときの亜樹の心情としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 受験が終わった後のことをうれしそうに話す美佳に対して気が早いと思いつつも、受験前に仲直りをするのができて本当に良かったと安心する気持ち。
- イ 本音を話しただけで、半年間全く話さなかったと思えないほど簡単に美佳と仲直りできてしまい、今日すぐにゆるしてしまった自分自身を疑問に思う気持ち。
- ウ 本心では美佳の話に納得できずゆるすつもりはないが、勢いに押されて仲直りをしたようにふるまってしまった自分を、救いようがないと情けなく思う気持ち。
- エ 泣いていた美佳がいつもの調子に戻って安心するとともに、思ったよりも簡単に仲直りできたことで自分たちのきずなの強さに気づき、うれしく思う気持ち。
- オ 長い間ゆるすことができないでいた美佳のことをあっさりゆるしてしまい、いつの間にか美佳のペアに飲み込まれてしまっている自分自身にあきれる気持ち。

問五——線部⑤「奇跡みたいだと思った。」とありますが、このとき亜樹は何を奇跡だと感じたのですか。具体的に説明しなさい。

問六

——線部⑥「亜樹は大きくうなずくと、すぐにシャープペンをにぎりしめた。」とありますが、このときの亜樹の心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美佳と仲直りできたことで、受験でも奇跡は起こせるのだということが分かり、このまま自分のペースで勉強すれば合格できると安心している。
- イ 美佳とお互いの本音を話し合い、受験後の約束までできたことに満足し、勉強では美佳に負けられないようにがんばろうと自分をはげましている。
- ウ 美佳とゆっくり話せたことは良かったが、思ったより時間が経っていて、受験まで二週間しかないので急いで勉強しなければいけないと焦っている。
- エ 奇跡は起こせるのだということを信じ、美佳との約束を実現させるためにも、絶対に志望校に合格してみせると決意し気合いを入れている。
- オ 半年も口をきいていなかった美佳と話すことへの不安や緊張から解放されてほっとし、受験への不安を振り払って勉強しようとしている。

問七

本文の内容や表現についての説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 亜樹を受験に合格させるために時間を惜しんで勉強を教えるお姉ちゃんの必死さが、美佳との対面をばばもうとする言動に表れている。
- イ 夏の県大会を境に関係が悪化した美佳と亜樹のやりとりを、第三者の視点から描くことで、二人の心情の変化を分かりやすく表現している。
- ウ 久しぶりに会話する美佳と亜樹が関係を修復していく様子を、二人の仲が良かったときの描写を織り交ぜながら描いている。

- エ ペアを解消したことを心から申し訳なく思い反省する美佳と、ゆるしてあげたいと思う亜樹の心が徐々に通じ合う様子が描かれている。
- オ 「ビッグマック」という二人にしか分からない特別なものを用いることで、友達とのきずなは大切だということを読者に効果的に伝えている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

① 昨今、^(a)「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といった言葉や、「現代社会では価値観が多様化している」「価値観が違う人とは結局のところわかりあえない」といった言葉が流布[※]しています。このような、「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣^{ゆうれつ}がつけられない」という考え方を相対主義といえます。「正しさは人それぞれ」ならまだしも、「絶対正しいことなんてない」とか、「何が正しいかなんて誰にも決められない」といったことさえ主張する人もけっこういます。

こうしたことを主張する人たちは、おそらく多様な他者や他文化を尊重しようと思っっているのでしょう。そういう善意はよいものではありませんが、はたして「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。そもそも、「正しさ」を各人が勝手に決めてよいものなのか。それに、人間は本当にそれほど違っているのかも疑問です。

たしかに、価値観の異なる人と接触^{せつじやく}することがなかったり、異なっ^ていても両立できるような価値観の場合には、「正しさは人それぞれ」と言っ^ていても大きな問題は生じません。X、訪ねることも難しい国の人たちがどのような価値観によって生活していても、自分には関係がありません。またたとえば、野球が好きな人とサッカーが好きな人は、スポーツのネタでは話が合わないかもしれませんが、好きなスポーツの話さえしなければ仲良くできるでしょう。サッカーが好きなのは間違っ^ていて、すべての人は野球が好きでなければならない、なんていうことはありません。

① こうした場面では、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」でよいでしょう。しかし、世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならぬ場合があります。たとえば、「日本の経済発展のためには原子力発電所が必要だ」という意見と、「事故が起こった場合の被害^{ひがい}が大きすぎるので、原子力発電所は廃止^{はいし}すべきだ」という意見とは、両立しません。どちらの意見にももつともな点があるかもしれませんが、日本全体の方針を決めるときには、どちらか一つを選ばなければなりません。原子力発電所を維持^{いじ}するのであれば、廃止した場合のメリットは捨てなければなりません。逆もまたしかり。*「みんなちがってみんないい」というわけにはいかないのです。

そんなときには、どうすればよいのでしょうか。「価値観が違う人とはわかりあえない」のであれば、どうすればよいのでしょうか。そうした場合、現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます。本来、政治とは、意見や利害が対立したときに妥協^{たきあひ}点や合意点を見つけたためのはたらきなのですが、最近、日本でもアメリカでもその他の国々でも、権力者が力任せに自分の考えを実行^(b)にウツすことが増えています。批判に対してきちんと正面から答えず、単に自分の考えを何度か繰り返したり、論点をずらしてはぐらかしたり、権力を振りかざして脅^{おど}したりします。

そうした態度を批判するつもりで「正しさは人それぞれだ」とか「みんなちがってみんないい」などと主張したら、権力者は大喜びでしょう。Y、もしもさまざまな意見が「みんなちがってみんないい」のであれば、つまりさまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択^{せんたく}は力任せに行うしかないからです。「絶対正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」というのであればなおさらです。決定は正しさにもとづいてではなく、人それぞれの主観的な信念にもとづいて行うしかない。それに納得^{なつとく}できない人とは話し合っ^てても無駄^{むだ}だ

から権力で強制するしかない。こういうことになってしまいます。

Z、「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」といった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てることを正当化することにつながってしまうのです。これでは結局、「力こそが正義」という、^②困った世の中になってしまいます。それは、権力など持たない大多数の人々（おそらく、この本を読んでくれているみなさんの大部分）の意見が無視される社会です。
では、どうしたらよいのでしょうか。

よくある答えは、「科学的に判断するべきだ」ということです。科学は、「客観的に正しい答え」を教えてくださいると多くの人は考えています。このように、さまざまな問題について「客観的で正しい答えがある」という考え方を、^③普遍主義といえます。探偵マンガの主人公風に言えば、「真実は一つ！」という考え方だといってもよいかもしれません。先ほどの相対主義と反対の意味の言葉です。「価値観が多様化している」と主張する人たちでも、科学については普遍主義的な考えを持っている人が多いでしょう。「科学は人それぞれ」などという言葉はほとんど聞くことがありません。

そして実際、日本を含めてほとんどの国の政府は、政策を決めるにあたって科学者の意見を聞くための機関や制度を持っていきます。日本であれば、各省庁の審議会（専門家の委員会）や日本学術会議などです。「日本の経済発展のために原子力発電所は必要なのか」「どれぐらいのカクリツで事故が起こるのか、事故が起こったらどれぐらいの被害が出るのか」といった問題について、科学者たちは「客観的で正しい答え」を教えてくださいとさえ思えます。

ところが、実は科学は一枚岩ではないのです。科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいます。そうした多数の科学者が論争する中で、「より正しそうな答え」を決めていくのが科学なのです。それゆえ、「科学者

であればほぼ全員が賛成している答え」ができあがるには時間がかかります。みなさんが中学や高校で習うニュートン物理学は、いまから三〇〇年以上も昔の一七世紀末に提唱されたものです。アインシュタインの相対性理論や量子力学は「現代物理学」と言われますが、提唱されたのは一〇〇年前（二〇世紀初頭）です。現在の物理学では、相対性理論と量子力学をトウイツする理論が探求されていますが、それについては合意がなされていません。合意がなされていないからこそ、研究が進められているのです。

最先端の研究をしている科学者は、それぞれ自分が正しいと考える仮説を正当化するために、実験をしたり計算をしたりしています。つまり、科学者に「客観的で正しい答え」を聞いても、何十年も前に合意が形成されて研究が終了したことにしても教えてくれますが、まさしく今現在問題になっていることについては、「自分が正しいと考える答え」しか教えてくれないのです。^④ある意味では、「科学は人それぞれ」なのです。

そこで、たくさんの科学者の中から、自分の意見と一致する立場をとっている科学者だけを集めることが可能になります。東日本大震災で福島第一原発が爆発事故を起こす前までは、日本政府は「原子力推進派」の学者の意見ばかりを聞いていました（最近また、そういう時代に逆戻りしつつあるような気がしますが）。アメリカでも、トランプ大統領（d）イトウリヨウ（在任二〇一七～二〇二二）は地球温暖化に懐疑的な学者ばかりを集めて「地球温暖化はウソだ」と主張し、経済活動を優先するために二酸化炭素の排出の規制を緩和しました。

権力を持つ人たちは、もっと直接的に科学者をコントロールすることもできます。現代社会において科学研究の主要な財源は国家予算です。そこで、政府の立場と一致する主張をしている科学者には研究予算を支給し、そうでない科学者には支給しないようにすれば、政府の立場を補強するような研究ばかりが行われることになりかねません。

このように考えてみると、科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄について、「客観的で正しい答

え」を教えてくださいるものではなさそうです。ではどうしたらよいのでしょうか。自分の頭で考える？ どうやって？

この本では、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものなのかを考えます。そうした考察を踏まえて、多様な他者と理解し合うためにはどうすればよいのかについて考えます。ここであらかじめ結論だけ述べておけば、私は、「正しさは人それぞれ」でも「真実は一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の関係の中で、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていくのだと考えています。それゆえ、多様な他者と理解し合うということは、かれらとともに「正しさ」を作っていくということです。

これは、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません。これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための最後通牒ちようめつです。みなさんが意見を異にする人と話し合った結果、「結局、わかりあえないな」と思ったときに、このように言うでしょう。「まあ、人それぞれだからね」。対話はここで終了です。

ともに「正しさ」を作っていくということは、そこで終了せずに踏みとどまり、とことん相手と付き合うという面倒な作業です。相手の言い分を受け入れて自分の考えを変えなければならないこともあるでしょう。それでプライドが傷つくかもしれません。しかし、傷つくことを嫌がっているのは、新たな「正しさ」を知って成長していくことではありません。

(山口裕之『みんな違ってみんないい』のか？ 相対主義と普遍主義の問題』筑摩書房)

※流布……世間に広まること。

※しかり……そうである。

※一枚岩ではない……組織や団体などが、必ずしも強く団結しているわけではないこと。

※相対性理論や量子力学……いずれも物理学の理論。

※懐疑的な……疑いをもっている。

※最後通牒……ここでは、「相手とのやり取りを一方的に打ち切るための最終的な言葉」のような意味。

問一 線部(a) (e)のカタカナを漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 X Y Zに入れるのに適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ なぜなら ウ ところが エ たとえば オ もちろん

問三 線部①「こうした場面」とありますが、その例として適切なものは○、適切でないものは×で、それぞれ答えなさい。

ア 飲食店の営業時間を、感染症拡大防止のために短縮するか、現状のままにするかを決める場面。

イ 自分が同じくらい魅力的だと思っている二つの学校に合格し、進学先を考える場面。

ウ 自分が好きではないアイドルグループの大ファンである友人と遊園地に遊びに行く場面。

エ 昆虫を食べる文化をもつ国があることを知って驚き、自国と異なる文化について考える場面。

問四 線部②「困った世の中」とありますが、どのような世の中のことですか。六十字程度で説明しなさい。

問五

——線部③「ある意味では、『科学は人それぞれ』なのです。」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。もつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が正しいと考える仮説を正当化するために行っている実験や計算の方法は科学者によってさまざまであり、そこから導き出される結果や主張も当然それぞれ異なるものになるから。

イ 科学については普遍主義的な考え方を持っている人が多く、合意形成がなされるまでの間は客観的であるかどうかは関係なく、誰でも自分の正しいと考えていることを主張すればよいから。

ウ 科学者は何十年前も前に研究が終了したことについては正しいと主張できるが、今現在問題になっていることについては自分が正しいと考えていることしか主張できず、各々主張が異なるから。

エ 権力者にとって都合のいい主張をする科学者は多いが、自分自身が正しいと考えていることを主張する科学者も多く、「客観的で正しい答え」をすぐに一つに定めることはできないから。

オ 現時点で科学的に正しいとされている答えは長年の研究によって導き出されたものであるが、この先の未来では他の科学者によって「より正しそうな答え」が生み出されるかもしれないから。

問六

~~~~線部「『正しさは人それぞれ』や『みんなちがってみんない』という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。」とありますが、筆者は多様な他者と理解し合うためにはどのような考え方が必要だと述べていますか。本文中の言葉を用いて五十文字程度で説明しなさい。

問七 自分と考えが異なる人と接するときには大切なことは何だと考えますか。以下の条件をふまえてあなたの意見を書きなさい。

①はじめにあなたの考えを書くこと。

②そのように考える理由について、根拠（自分の体験であっても、そうでなくてもよい）を挙げて書くこと。

③段落は、二つか三つ作ること。



